

「大腸がん α ドキュメンタリー映画」

映画監督 野澤 和之



樋野興夫先生とお会いしたご縁で、がん哲学外来に関するドキュメンタリー映画を創ることになりました。どんな映画にしたらいいのか？構想中に、何と私自身が大腸がんになってしまいました。ステージ3aという診断でした。開腹手術をして、入院中は、樋野先生の本を持ち込み、自分に言葉の処方箋を与えていました。そのかいあってか、退院後は、多くの賛同者の御蔭で、映画創りが実現できる運びとなりました。それにしても、自分のがんと映画創りが結びつくなんて！目下の急務はがん感謝のみでしょうか。さて、空っぽの器、いいですね。空にしておければいろんなものを受け入れられますからね。大賛成です。ドキュメンタリー映画そのものも空の器にできないものか？考え始めています。ドキュメンタリー映画は、始まったばかり。前に進むしかない人生をまた繰り返しています。生きるとは、こういう事なのかな、と実感しています。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

お問い合わせは「がん哲学外来映画製作委員会事務局 2018」HP

<https://gantetsueiga2018.amebaownd.com/>



「今を生きています」

池袋帰宅中カフェスタッフ 角田 万木



2013年5月に卵巣がんと分かり、6月に手術、5年生存率30%と言われましたが、共存となった今も元気で、4年8カ月経ちました。当時はどんどん悪い方向に向かう病状に泣いてばかりで、抗がん剤の副作用が精神的にきてしまい、外来の日に病院から飛び降りたいと思うようになっていました。その時に相談した病棟医が心理士を紹介してくれ、気晴らしに外に出るように勧められ、自分の心を守るために、必死にいろんな所に出掛けました。人見知り一人で行く勇気のない私に、夫はいつも付き合ってくれました。そして、病気になったからこそその出会いをたくさんして、体験している事は、私の人生にいろんな花を咲かせてくれています。がん哲学カフェもその一つです。当時、主治医から「楽しく過ごして」と言われましたが、5年生きられるか分からないので、どう生きてよいか分からなかった。でも、カフェでいろいろな方たちの話を聞いている内に、いつの間にか楽しく過ごしています。落ち着いたと思ったらやってくるいろいろな事を、辛いけど乗り越えられるのは、出会った方たちが支えとなっているからです。そして、病気を忘れて過ごせるのは、私が変わっていくところを見守ってくれている主治医のお陰です。主治医が助けてくれた命を大切に、何があっても受け入れて生きていきたい。今を生きられる事に感謝して、これからも自分にできる事をしていきたいと思います。

「僕とメディカルカフェ」

名古屋メディカルカフェどあらっこ代表 中村 航大 15歳



僕がメディカルカフェどあらっこを始めて一年が経ちました。このメディカルカフェを始めたことで、僕は病気の話や悩み事などを初めて他人と共有することができました。今まで、病気のことを家族、親戚としか話したことがなかった僕が、癌を経験した者として、治療のこと、苦しかったことなどを話し、参加者の方に伝えたり、参加者の方から学ぶこともたくさんあります。最初は緊張していた参加者の方も、最後には、「ありがとう、楽しかったよ」と笑顔で帰ってくれます。それが僕にとって一番うれしい瞬間です。この会を始めた樋野興夫先生のような優しい風貌にはなれませんが、これからも、一人でも多くの人々の心を楽にしてあげられるそんな存在になりたいです。

編集後記:自らの経験をバネに映画を製作し始めている野澤和之監督。がんとともに今を生きていながら、スタッフとして池袋帰宅中カフェで働いている角田万木さん。そして15歳という若さでメディカルカフェの代表を務める中村航大くん。この3人に共通するものは決してがんという名の病ではないと感じています。それはこのニュースレターを読んでもらって一人一人の心にもあるものだと思います。他者のために生きる。それを実践している3人には敬服の念しかありません。

編集:青柳志保 制作:山田真子

Eメール:shiho@bamakoto@gmail.com

一般社団法人がん哲学外来ホームページ <http://www.gantetsugaku.org/>

